



「ワクチンを上手に使って病気を予防する」

寒さが日ごとに増し、人も牛も様々な感染症が流行する時期になりました。

特に0~3か月齢の子牛が一度下痢や呼吸器病にかかると、その後の発育が遅れ、上場までにその遅れを取り戻すのは難しいものです。

初乳による移行抗体の獲得と、適切な時期のワクチン接種でこうした病気から子牛を守ることができます。市場上場前に打つワクチン以外に、ワクチン接種について考えてみませんか。

1 ワクチン接種の意義

生まれた子牛は、初乳から移行抗体を得て、病気から守られます(受動免疫)。

この移行抗体はやがて低下し、3週齢頃から子牛自身の免疫(能動免疫)が機能し始めますが、最初はこの機能が十分に発達していません。このような病気の感染リスクが高い期間に備えてワクチンを打つことで、予め病気に対する免疫を獲得させる事が出来ます。

ワクチンを接種することで、

- ①感染症の予防、②感染しても重症化しない、③農場内でのまん延を防ぐ

といった効果が期待できます。

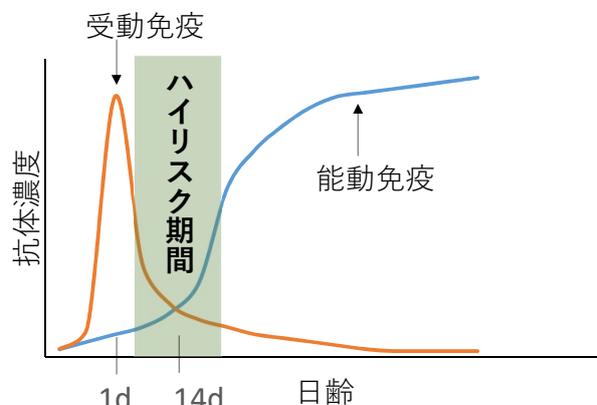
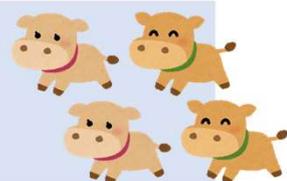


図 子牛の受動免疫と能動免疫における抗体濃度の変化

※Heinrichs,A.J (2001) より一部改変して作成

ポイント 自家保留する牛にもワクチンを!

子牛の時の疾病による発育遅延は、後の繁殖成績にも影響します。上場する牛だけではなく牛群全頭に接種するようにしましょう。



2 ワクチンを打つ前にすべきこと

① 確実な初乳給与による移行抗体の獲得

免疫グロブリンの吸収率が高い分娩後6時間以内に、初乳を飲ませるようにしましょう。

こんな牛は

注意

母牛が初産……………初乳量不足の可能性
難産で生まれた子牛…初乳吸収率が低い



初乳製剤(目安2袋)を補助的に給与する

② 飼養環境によるストレスを減らす(特に0~3か月齢)

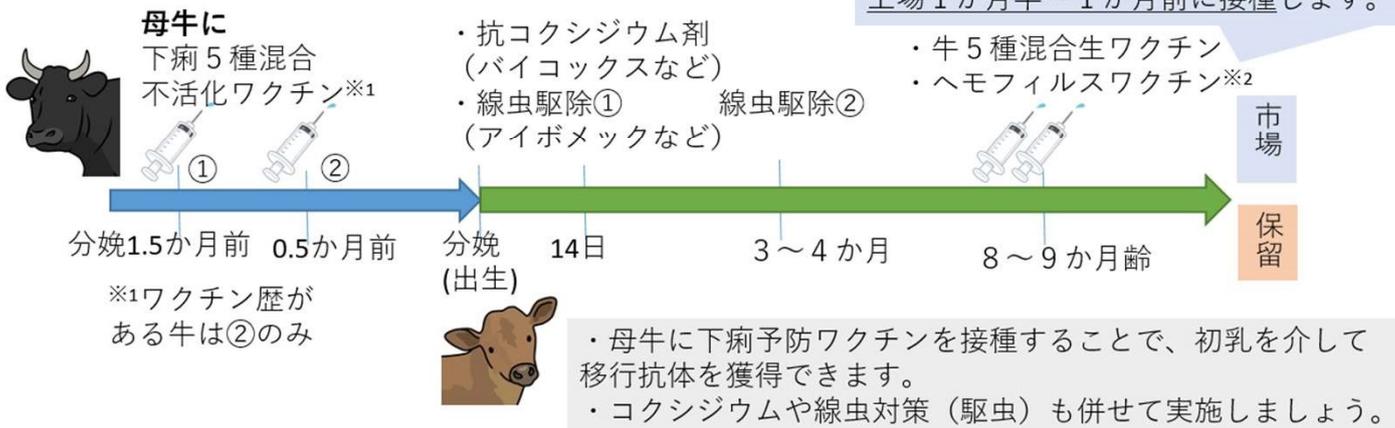
子牛にストレスがかかる環境下では、免疫力が低下して病気にかかりやすくなります。基本の寒冷対策ができていないか、チェックしましょう。

- ✓ 牛体・牛床は乾いた状態を保つ
- ✓ カーフジャケットやヒーターで保温
- ✓ コンパネなどですきま風を防ぐ
- ✓ 換気(子牛の保温スペースを確保しながら)

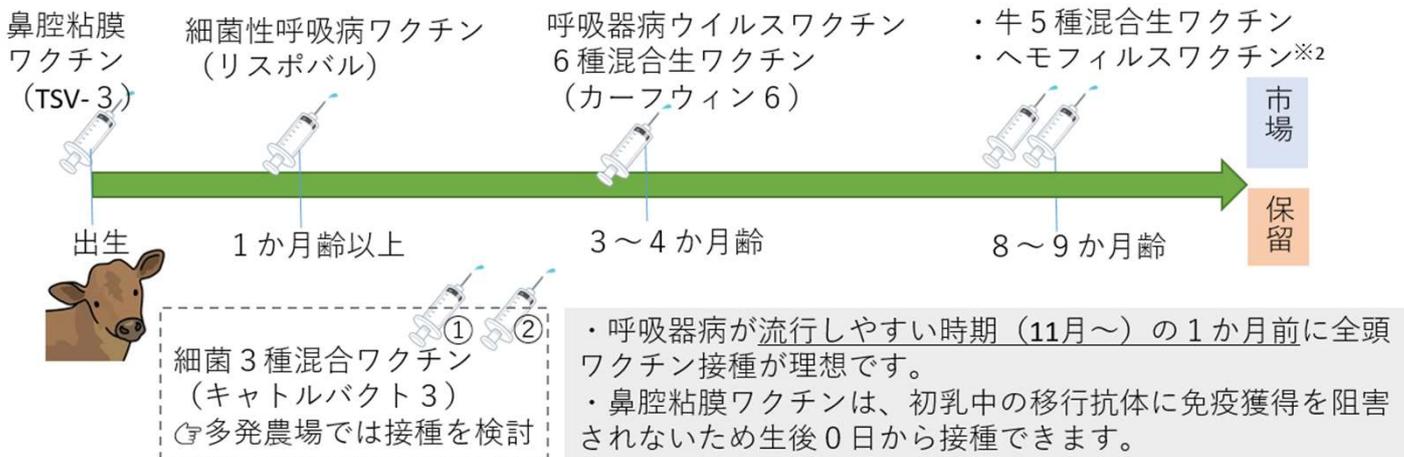
3 ワクチネーションプログラムの例

ケース1：下痢の発生を予防したい

※2接種後数日は体調を崩す場合があるほか、
 購買者が市場後に2回目を接種することから、
 上場1か月半～1か月前に接種します。



ケース2：呼吸器病の発生を予防したい



※ワクチンを接種する際は、かかりつけの獣医師に相談の上接種してください。

《子牛を大きく育てよう!》～岩手県肉用牛飼養管理マニュアルから～

○ 自然哺乳と人工哺乳のポイント

マニュアルの
 ダウンロード
 はこちら→



自然哺乳



①十分な母乳が出ているか観察

泌乳量は、母牛の産次や体格、分娩前後の栄養状態によって変わります。

頻繁に母牛の乳頭に吸いついたり、乳を突き上げる動作をしている場合は、母乳の不足が疑われるので、**代用乳(ミルク)**を追加給与しましょう。

②牛体を汚さない

糞尿で乳頭が汚れていると、子牛が様々な細菌を口にして下痢をする原因となります。

親子のスペースはきれいな状態を保つようにしましょう。



③授乳期のエネルギー不足に注意

母牛が栄養不足だと、子牛が消化しにくい母乳が産生されて下痢(母乳性白痢)を引き起こす場合があります。

分娩後も**増し飼い**でエネルギーを充足させるようにしましょう。

人工哺乳



①ミルクの温度

子牛の口に入る温度で**40～42℃(体温に近い温度)**が最適です。

冬場は調乳後すぐにミルクが冷めてしまうので、特に温度に注意しましょう。

※熱湯でミルクを溶かすと、タンパク質が変性してしまうため、**60℃以下のお湯**で調乳してください。

哺乳ボトルにお湯を入れて温めておくのと冷めにくいよ!

②乳首の穴の大きさ

乳首の穴の広がり、口に流れ込むミルクの量が増え、誤嚥の原因になります。子牛がむせるようなら乳首の穴が大きすぎる可能性があります。



←誤嚥しにくいように穴が2つに分かれた乳首もあります

お問い合わせは最寄りの農業改良普及センターへ >>